

抄 訳

ロンドンにおける

民衆の生活と労働

The Life And Labour Of
The People In London

チャールズ・ブリス
沢村 美佐子 訳

訳 序

一八四〇年、リバプールに生まれたチャールズ・ブリスは富裕な船舶業者で、生涯、実業には積極的であった。しかし、また彼は、学究的人でもあった。一実業家にすぎなかつた彼を、一八八六年から一九〇三年まで十七年間の大がかりな調査へと駆立て、十七冊の大部な報告書を作らしめたものは、当時の英国の社会状態であった、という他ない。ピクトリヤの繁栄がすぎさり、一八七三年からはじまつた不況は多数の貧困者を生みだして行つた。一八八三年に伝道師W・C・プレストンのトラクト「ロンドンから見捨てられた者の怒泣」が広く読まれるや、ロンドンの貧乏物語がセンセーショナルに扱われ始めたが、一方、それらを誇張たとして、無視する人も少なくなかつた。ブリスが貧困の事実を明白にするため調査に着手したのは、この頃である。彼自身も一時総裁をつとめたことがある王立統計学会を中心として強力な調査団をつくり、広範（全人口の約二

分の一に相当する）な調査を行なつたブリスは「事態を明るく解するよりも、むしろ暗く描こうとした。社会が当然対処して行くべき諸悪を軽視しないようにするためである。しかし、貧困が質量共に深刻であることが判明するにつれ、私は、誇張をしなかつたのではないかと不安を感じ始めた」のであつた。彼の調査の成果である「ロンドンにおける民衆の生活と労働」が、今日の英国社会保障制度に基礎的貢献をなしていることは云うまでもないが、本書は、また、資料の収集分類方法においても、諸所得階層の分布地図作成方法においても先駆的貢献をなした。貧困についての知識を深めたブリスは、老令者の惨めな生活に関心を寄せ、洲設置の老令年金を強力に主張する一人となつていつた。彼は、政治的には保守党であつたが、労働者、労働組合に対しては共鳴的態度であつたことは、晩年の著作にも見られる所である。一九一六年逝去したブリスの本書は、余りにも有名でありながら、その龍大な量のためか、わが国では未だ訳書もない。以下は、原本の約二百頁に相当する「第一部 ロンドン東部」のうち、各対象地区の地理的特徴、構造上の比較、或いは諸施設に関するもの、家計簿の内容検討等、細部にわたつてい

るものを除き、特に主論と思われる部分を抄訳したものである。なお、原本の箇所は各章末に付した。

1. Poverty. p. 5

2. Pauperism, A Picture; The Endowment of Old Age, London 1892

The Aged Poor; Condition, London 1894

Old Age Pensions and The Aged Poor;

Proposal, London 1899

3. 一九〇四年、ベルフォアの枢密顧問官をつとめた。

4. Industrial Unrest and Trade Union Policy, London 1914

一、緒 言 (一)

このロンドンにおける民衆の生活状態と職業に関する調査は一八八六年に着手した。調査資料は学務訪問員の記録に求めたが、それは彼等が担当地区内の戸別訪問を行ない、学童を持つ家庭とはたえず接触を保つていたので、住民達の生活に通曉している上、学務訪問員のノートには、裏通りの隅々にいたるまで、ありとあらゆる家庭が記載されているからだ。私は学童をもつ家庭を調査の主対象としたが、これは次のような仮説に基く。「職業の選択は、通常、結婚以前になされる。学童の父親達の職業も、彼等の子ども達が学童期を迎える以前に選択されたものに違いない。従つて各々の社会階層 (section) における学童の父親、その他の既婚男子、未婚者の比率や家族構成はほぼ一致する筈だ。また、学童の父親達の分類に従つて、それ以外の成人男子を分類するのも正当である」と考へる。

さて私の目的は、この世にみちている貧困、悲惨な境遇、墮落等が通常収入・日常生活の慰安とどのような関係にあるかを数字によつて示し、諸階級 (class) の生活状態を明らかにすることであつた。もしも、このような事実を記述することにより、社会改革者達が、現存する「悪」からの救済策を見出

第一表 学務訪問員による記載例

セント・ヒューバート街 (階級A——地図色別・黒)⁽³⁾

	階級	階層
1. 日傭労働者……………1室……………学童2…………… (現在、ホップ採集中)	B.	2
臨時家政婦……………1室, 未亡人……………学童1, 幼児1…………… ……………1室……………家族1, 学童なし……………	B.	33
2. 靴職人……………1室, 妻手伝……………学童2…………… 日傭労働者……………1室……………学童1, 幼児2…………… (極めて低い階層の家族, 職業学校生徒1)	C. A.	11 1
? ………………1室, 未亡人……………学童1……………	B.	35
行商人……………1室……………学童3…………… (変人) ……………1室……………1家族, 学童なし…………… (1室——空室)	A.	22
3. 行商人(女)……………1室……………学童3…………… (夫, 服役中, 母同居——いかがわしい女)	B.	35
行商人……………1室……………学童1…………… (二人の大きい息子がブラブラしている)	A.	22
屋台魚売り……………1室, 妻手伝……………学童2, 幼児1…………… ……………1室……………1家族, 学童なし……………	B.	22
4. 日傭労働者……………1室……………1妻子不在…………… 荷馬車馱者(雇用主が……………1室……………学童4, 幼児1…………… 一定でないもの)……………1室……………いかがわしい女…………… 花の立売り……………1室……………学童なし……………	B.	3
5. 煙突掃除人……………1室……………妻死去, 学童4…………… ? ………………1室……………学童1……………	B. B.	19 18
行商人(女)……………1室……………学童1……………	B.	35
6. 日傭労働者……………1室……………学童3, 幼児2, 学令超過女兒1…………… (Nos. 4. 5. 6. は特異な関係をもっている。同宿人は全員, 水道栓と便所がある小さな裏庭を共用している)	B.	2
7. コルク扱き……………1室……………学童3, 幼児1…………… ……………1室……………1家族, 学童なし……………	B.	8
8. 9. ………………製材所……………		
10. 11. 日用雑貨品店……………2室, 未亡人……………学童1, 母の手伝2……………	E.	35

——一般的特徴—— 恐るべき場所だ。当地区では最もひどい街。住民の殆んど全部が最下層の人々で、清潔・礼節の観念はまるで欠けているようだ。一室以上を使用している家族も少ない。子ども達のうち、職業訓練をうけているものは皆無にひとしく、路上をうろついている仕末だ。彼等が次代の泥棒・愚連隊の中核となることは間違いない。家屋は悉く極めて古く、隣家との見境もつかない程、つぎはぎだらけだ。狭い裏庭も増築でつぶされている。家屋はあらゆる点で最悪の状態にあり、非衛生きわまりない。過密住だ。その上(修繕が殆んどなされていない理由と思われるのは)ごく最近まで、家主の兄は衛生検査官だったのだ! 多くの部屋に公然と売春婦が住んでいる。

し、或いは政策の誤用を予防するのに役立つならば望外の喜びである。

貧しい労働者達が余儀なく不利な立場におかれてゐることは全く救われ難い。日稼労働者達は常備労働につきたくてもつけないし、働らきたいだけの程よい仕事を得たくても得られない。工場主や商人は競争が許す範囲内では働けない。金持が貧乏救済をするにはその富の源を増すこと以外にどうしようもない。この「どうしようもなさ」から逃れるためには、内在する問題を、少しでもましな方向へ持っていく他ない。私の試みは、正しくこの点にある。

ここで、学務訪問員により提供された資料の記載例を紹介しよう。我々は、この記述より一覽表を作成し、また地図に採色した。この資料の価値は、統計学的には観点、対象の広範なことにある。一覽表に直接示された人々——学務訪問員が掌握してゐる世帯主、学童、年長、年少の子ども達等——は全人口の二分の一ないし三分の一に該当する。

変動をあまりない社会の中で、現代ロンドン東部の貧困街の見取写真を正確にとることが極めて困難であることは言うまでもない。群衆写真をとる時のように、写真の細部は絶えず変わるが、どの瞬間を選ぼうとも、一般的効果はほぼ同一だ。私は捉えた瞬間に表われた事実をネガに焼きつけるような早取写真をとろうとした。そうすれば読者が人世の移変わり、騒動、混乱等の動きを付加えてくれるに違いないから。

1 East London Chapter. I Introductory, pp. 1—8, pp. 24—27

2、一八七〇年から一九〇二年の間、英国で行なわれた制度。地方納税者より選出され各地方の初等教育の運営にあたった。ロンドン東部には当時六六名いた。

3、各街の階級を示す地図の色別は次の通りである。

黒色——最下層 (the lowest grade)

藍色——極めて貧しき (very poor)

空色——中位の貧困 (ordinary poor)

紫色——貧困が混ざつてゐる (mixed with poverty)

ピンク——労働者階級、安定した生活 (working class, comfort)

赤色——かなり豊かな暮らし (well-to-do)

黄色——富裕 (wealthy)

4、後述

一、概 説

対象地域はロンドン東部(シヨーディッチ、ベッナル・グリーン、ホワイトチャペル、セント・ジョージ街東部、ステプニー、マイルエンド旧街、ポブラー)及びバッキニーで、その居住人口は約九十万九千人である。私はこれを次の八階級に分類した。

A、最下層の季節労働者、浮浪者、準犯罪者

B、臨時日稼労働者——「極貧」

C、不規則所得者 共に「貧困」

D、少額定期所得者

E、規則的標準所得者——貧困線を上廻る

F、高給労働者

G、中産者の下
H、中産者の上

ここでは「貧困」と「極貧」とを便宜上区別してゐる。「貧困」とは辛うじて暮らしてゐる程度、つまり標準世帯当週十八ないし二十一志位の収入のもの、「極貧」は何らかの原因によりこの線を大中に下廻つてゐるものをいう。これは或いは彼等自身の過失に基づくものかも知れないが、私が問題としたのは、まず理由よりも、その数だ。第二表は収入及び地位による分類「階級」を横軸とし、職業による分類「階層」を縦軸として作成したものである。まず各階級とその生活様式について概略を記そう。

A階級、最低。季節労働者、露店商、浮浪人、犯罪者、準犯罪者よりなる。約一万一千人、人口の1・25%。荒すさんだ生活で無計画そのもの。食事は全く粗末で、飲酒が唯一のぜい沢。三ペンスの宿泊費がないとたちまち簡易宿泊所から夜の路上へと追出される。こんなことから浮浪人、物乞い、恐喝を働く者が出て来る。決して有益な仕事をしようとはしないし、節儉もしない。彼等は触れるもの全ての品性を墮落させる。ある程度までどの都市にも存在する必要悪かも知れない。彼等自身は改善能力を持たないが、彼等の数は、他の階級の経済状態、慈善事業界の配慮、警察管理の圧力により変わるだろう。この階級が性格的遺伝によるものではないことを切望しているが、世襲的傾向があることは否めない。学童よりも青少年達に問題がある。この階級の正確な人数については疑点があるが、総人口に比し極めて少数であ

ロンドンにおける民衆の生活と労働

東 部 及 び バ ン ク ニ

階 層	極 貧		貧 困		快 適 な 生 活		富 裕		計
	A	B	C	D	E	F	G	H	
	最 低	日 稼	不 規 則 収 入	最 低 限 の 規 則 収 入	標 準 的 普 通 収 入	高 給	中 産 階 級 の 下	中 産 階 級 の 上	
1	9,050	—	—	—	—	—	—	—	9,050
2	—	41,307	1,198	—	—	—	—	—	42,505
3	—	4,541	15,275	—	1,349	—	—	—	21,165
4	—	1,199	—	38,236	127	—	—	—	39,562
5	—	297	—	11,171	65,507	252	—	—	77,227
6	—	—	—	9	343	17,042	—	—	17,394
7	132	4,390	6,624	5,979	28,668	5,122	—	—	50,915
8	106	6,446	7,544	10,551	35,774	4,299	—	—	64,720
9	63	1,458	2,172	3,740	23,845	4,404	—	—	35,682
10	100	3,046	4,811	6,477	27,268	12,091	—	—	53,793
11	63	6,273	9,359	12,670	27,420	3,277	—	—	59,062
12	35	821	1,300	3,602	15,569	465	—	—	21,792
13	8	138	9	726	5,160	3,642	—	—	9,683
14	—	595	801	1,680	6,008	831	—	—	9,915
15	18	899	490	3,121	14,449	2,537	—	—	21,514
16	—	201	50	808	10,827	877	—	—	12,763
17	—	283	759	435	8,949	22	—	—	10,448
18	26	504	775	1,884	10,411	2,003	—	—	15,603
19	17	1,837	3,325	1,708	9,243	3,342	68	—	19,540
20	—	36	27	429	3,224	12,948	6,301	574	23,539
21	—	—	—	—	—	—	1,781	877	2,658
22	302	3,461	4,378	2,266	4,290	318	—	—	15,015
23	69	327	1,514	1,251	4,166	2,415	198	—	9,940
24	—	235	266	2,016	12,320	7,567	1,556	—	23,960
25	—	—	—	—	292	4,766	6,032	4,538	15,628
26	—	—	—	102	80	1,081	1,059	—	2,922
27	—	9	33	75	419	1,226	3,139	1,427	6,328
28	—	483	721	1,937	11,528	15,432	7,260	1,107	38,468
29	—	137	205	553	2,600	3,436	1,915	175	9,021
30	—	—	—	—	—	362	682	3,441	4,485
31	—	2,044	461	200	172	53	—	—	2,930
32	—	—	—	—	801	447	518	75	1,841
33	59	6,990	3,410	2,930	2,074	40	—	—	15,503
34	—	2,058	1,590	2,048	1,485	39	—	—	7,220
35	55	1,842	994	1,315	1,334	107	10	—	5,657
36	—	—	—	140	355	330	257	—	1,082
37	—	406	178	650	1,713	70	5	—	3,022
38	—	—	—	70	639	230	597	—	1,536
39	876	7,799	5,978	10,108	29,444	10,167	3,014	1,065	68,451
40	—	—	—	—	8,500	—	—	31,500	40,000
計	10,979	100,062	74,247	128,887	376,953	121,240	34,392	44,779	891,539
百分率	1.23	11.22	8.33	14.46	42.28	13.60	3.86	5.02	100.00

第二表 階層と階級

ロンドン

階 層	種 類	世帯主	多少なりとも扶養されたる者			20才以上の未婚男子及び未亡人	計	百分率
			妻	児 童	青 年			
				15才未満	15-20才			
<男子>								
労働者	1 最下層、浮浪者等	2,494	2,480	736	1,424	1,916	9,050	1.02
	2 全くの日雇労働者	8,725	8,665	16,516	3,965	4,634	42,505	4.77
	3 やゝ常備的日雇労働者	4,358	4,335	8,553	2,075	1,844	21,165	2.37
	4 常備労働者、低賃金	8,412	8,351	15,636	3,730	3,433	39,562	4.44
	5 常備労働者、普通賃金	16,019	15,937	30,949	7,546	6,776	77,227	8.66
	6 組長、監督労働者	3,555	3,529	7,132	1,692	1,486	17,394	1.95
職 人	7 建設業	10,377	10,324	20,980	5,008	4,226	50,915	5.71
	8 家具・木工等	13,113	13,069	26,878	6,463	5,197	64,720	7.26
	9 機械・金属	7,314	7,255	14,689	3,481	2,943	35,682	4.00
	10 雑貨	11,106	11,070	21,797	5,277	4,543	53,793	6.03
	11 衣服	11,960	11,904	23,947	6,000	5,251	59,062	6.63
	12 食	4,403	4,384	8,820	2,224	1,961	21,792	2.44
運輸従業者	13 鉄道従業員	1,972	1,956	4,008	946	801	9,683	1.09
	14 道路輸送従業員	2,001	1,995	4,092	989	838	9,915	1.11
補助労働者	15 店員	4,457	4,442	8,683	2,097	1,835	21,514	2.41
その他の賃金取得者	16 警官、軍人、下級吏員	2,618	2,603	5,192	1,256	1,094	12,763	1.43
	17 海員	2,350	2,324	3,899	914	961	10,448	1.17
	18 その他の賃金取得者	3,667	3,657	5,480	1,323	1,476	15,603	1.75
小工業主	19 家内工業（傭人なし）	3,920	3,911	8,131	1,972	1,606	19,540	2.20
	20 小工業主	4,464	4,445	10,167	2,526	1,937	23,539	2.64
	21 大工業主	511	510	1,134	279	224	2,658	0.30
販売従業者	22 行商人・露店商	3,004	2,992	6,067	1,500	1,452	15,015	1.68
	23 日用雑貨商	1,986	1,975	4,042	1,034	903	9,940	1.11
	24 小商店	5,057	5,030	9,413	2,305	2,155	23,960	2.69
	25 大商店(店員を雇っている)	3,078	3,064	6,581	1,609	1,296	15,628	1.75
飲食店	26 コーヒー店及び下宿	606	599	1,167	285	265	2,922	0.33
	27 酒場(許可あり)	1,327	1,321	2,497	614	569	6,328	0.71
俸給生活者等	28 事務員・代理人	7,999	7,967	15,461	3,694	3,347	38,468	4.31
	29 下級専門職業	1,860	1,848	3,665	878	770	9,021	1.02
	30 自由職業	913	909	1,847	441	375	4,485	0.50
無職	31 病人及び無業者	605	600	1,176	288	261	2,930	0.33
	32 資産生活者	443	441	627	148	182	1,841	0.21
世帯主が男子の場合 計		(154,674)						
<女子>	33 家事使用人	5,328	—	8,189	1,986	—	15,503	1.74
	34 裁縫	2,524	—	3,773	923	—	7,220	0.81
	35 小商業	1,889	—	3,027	741	—	5,657	0.63
	36 雇主及び専門職業	363	—	580	139	—	1,082	0.12
	37 援助を受けている者	1,072	—	1,566	384	—	3,022	0.34
	38 利子・年金生活者	574	—	774	188	—	1,536	0.17
世帯主が女子の場合 計		(11,750)						
	39 その他の成人女子	—	—	—	—	—	68,541	7.68
	40 調査対象外人口	—	—	—	—	—	40,000	4.49
計		166,424	153,892	317,871	78,344	66,557	891,539	100
	施設収容者	—	—	—	—	—	17,419	—
	人口総計	—	—	—	—	—	908,958	—

ることは確かだ。下品ではあるが危険ではない。

B階級。臨時・日稼収入(極貧)十万人、人口の十一・二五%。階層2はB階級と一致する範囲内では階層1(労働者とはよべないような人)を除く日雇労働者をさす。日雇労働者の階層3は、大抵時間給で雇用期間は週、月又は季節。階層4は低賃金とは云いながら何がしかの規則的年収がある。ロンドン東部における日雇労働者の最大の働き場はドックだ。B階級の労働者は平均週三日しか働かないが、彼等が働く機会を与えられたとしても、それ以上働くものがあるかは疑問だ。女子を除いて考えてみると、B階級のどの階層をとり上げてみても無策・無能・怠惰・飲酒等により、貧困者になるべくしてなった者が大勢いる。彼等の理想は働きたいときに働き、遊びたいときに遊ぶことだ。これこそまさに貧乏人仲間の中で「有閑者」と呼ばれている連中だ。彼等の収入は産業の景気により異なる。過半数の時もあるが一文なしの時もある。この階級では殆んど全部の妻達が何らかの仕事を持っている。真面目な女は男達よりも着実に働いているだろう。たゞ、どれもこれも金払いが悪く、家賃だけでも収入を得たら大したものだ。少年少女が仕事を見つければ比較的容易である。少女達は、家から通えば、週四―五志を母に払う程度。少年達は悪くすると路頭に迷いA階級に転落する傾向がある。一方、勤勉有能な少年は間違いないC・D・E階級に昇進する。B階級、とりわけ「労働者」は男達が一生をすごす場所ではない、知的、道徳的、肉体的に無理だというのではない限り。

C階級。不規則収入。七万五千人、人口の約八%。

これこそ競争の犠牲者で産業不振の激浪が彼等の上にのしかかっている。C階級の大部分をなしている階層3の労働者は、請負仕事の者或いは、季節や雇用の性格により仕事在不規則な者である。沖仲士や河岸人夫は週に僅か一、二日しか仕事につけないかと思えば、建築労働者は年に八カ月の仕事しかない。彼等は一様に、常備になりさえすれば階層5となれるような人達だ。不規則労働者の中でも、頑健な身体で石炭・穀物関係に働く人または材木を扱う才能・技術をもつ人達は職人同様の高賃金を得る。彼等は忽ち十五―二十志を稼ぐが体力消耗も激しいので、金がなくなるまで飲食を続け、殆んど家には金を入れない。沖仲士のように特別な技術を要し、同業者組合により保護されている場合も同様だ。それにも拘わらず階層3に数えられているのは、彼等の人数が多すぎるからだろう。商況が不振である上に、過剰労働力により景気が左右されるもの他に、季節により左右されるものがある。景気の時期は様々にずれているにも拘わらず、多くの者は仕事をつないで行こうとはしないで万事成行きまかせだ。時間一杯に働く程の才覚がある者は階層5に行ってしまうだろう。逆に疾病のため、階層5から3へと転落して来る者も多い。そのようなとき、幼い子どもが多数いる世帯では、貧困の圧力が強い。夫婦のみの場合は何とかたべられるし、学校を出た

子ども達は直ちに自活できる。しかし、上の子どもが学校へ行き、下の子どもが母親の手にかかっているような時は、生活の苦しさを最も強く感じる時だ。

階層3は、どうにか生活しているような人々で将来のことをまるで考えていないとは云え、他の階層よりも道徳的に低下している訳ではない。常備の仕事をする資質もあるし、たとえ不規則雇用であってもまじめな仕事につけば上の階層にもあがれる人達なのに彼等は不遇なのだ。

この階級では男子が失職している間、女子は、わずかばかりの金のために雑役・洗濯・針仕事等をする。彼女達は特別の技術を持っている訳でもないし、仕事を続ける気もない。

D階級。少額規則収入(貧困)十二万九千人、人口の約十四・五%この人達すべてが常備労働者で「規則収入」とよんでも差支えない程経常的な収入を得ている点、C階級とは大きく異なる。D階級は階層4とはよ一致する。階層4は、工員・ドック人夫・倉庫人夫・駁者・配達夫・運搬夫・ガス工事人等の寄合い世帯だ。彼等の仕事は、技術、知性を要しないものが多い。規則収入者は収支を償わせるのに懸命であるとは云え、家族に病人があつたり、妻が酒呑みであるというのではない限り、困窮状態に陥いることはない。概して、礼儀正しく着実な人々で子どもへの教育には熱心だ。階層4では男達の収入を補うために、女達は熱心に働く。妻の家計のやりくりが大いに物をいう。C及びD階級は、当地区における事実上の中産階級を構成

している。

E階級。標準的規則所得。三十七万七千人、四二%
 一覽表では最多数。階層5（職人を除き、週収入二十二—三十志のもの全部）の大部分だ。この階層には、低賃金のため或いは大家族のために「貧困線」から上がることが出来ない人もいるが「極貧」はきわめて少ない。大部分のものは独立した家計を営み、相当快適な家庭生活をおくる。通常、妻は働かない。

E階級の労働者は「慈善」とよばれているようなものには毅然とした態度を取って居り、受入れることは誇りが許さない。彼等は、彼等自身の手の中に未来をつかんでいて、協力とか団結により困難を切抜けようとしている。概して、かなり財産を持っている。

F階級。高給労働者（階層6）十二万一千人。人口の約十三・五%。最高給の職人その他より成る。階層6の週収入は三十志以上、四十五または五十志だ。彼等は産業軍下士官ともいふべき存在だ。彼等の仕事は「監督」だけであるから、作業計画をたてたり指令をしたりしない。イニシアティブをとる訳ではないので利益分配にはあずからないものの職責に対しては十分な支払いを受ける。彼等が支柱の役割を果たさなかつたら、いかなる大事業も統制がとれなくなるからだ。子ども達は事務員となる。妻は、働くとすれば洗濯とか洋服店を経営し、少女店員を雇入れる。階層6の人々とF階級に数えられている職人達との間には大きな差異がある。すなわち労働監督者は、物事を雇用主

側から考えるが、熟練した職人は被傭者側から考

G階級。中産階級の下三万四千人、約四%。商店経営者、小雇用主、事務員、下級専門技術家等々。勤勉、誠実にして生活力旺盛なる階級。

H階級。中産階級の上。四千五百人、五%。ここでは、Gを上廻るものを一括し、「召使いを擁している階級」と簡単によんでおこう。このうちの三分の二はハックニー地区に居住している。

第三表 職人（熟練者）の階級分布

	A	B	C	D	E	F	計
建築業	132	4,390	6,624	5,979	28,668	5,122	50,915
家具・木工等	106	6,446	7,544	10,551	35,774	4,299	64,720
機械・金属	63	1,458	2,172	3,740	23,845	4,404	35,682
雑貨	100	3,046	4,811	6,477	27,268	12,091	53,793
被服	63	6,273	9,359	12,670	27,420	3,277	59,062
食品	35	821	1,300	3,602	15,569	465	21,792
	499	22,434	31,810	43,019	158,544	29,658	285,964
	22,933		74,829		188,202		
被服（一）	6,336		22,029		30,697		
その他の職人	16,597		52,800		157,505		

（註）この数字は妻子を含むものである

なおイリスト・エンド特有の熟練職人その他につき二、三を補足しておこう。

第三表は職人がどの階級に属するかを表わすものである。ここで示されているように、貧困線（C・D階級）またはそれ以下のもの（A・B階級）を一〇〇とする、貧困線を上廻るもの（E・F階級）は二〇〇であるが、貧困線以下で大きくなっている被服関係を除けば、この率は一〇〇対二三〇となる。

△建築業▽ 不景気象徴だ。彼等のうち「貧困」及び「極貧」は三三・六%もいる。建築作業に加わる不熟練労働者を職人の中に数えていないことは云う迄もない。

△家具・木工類▽ 船大工、樽製造を含む。船大工は殆んど仕事がなく減りゆく職業だ。樽製造も同様。輸入する砂糖、コーヒーがホッグズヘッド（大樽）入りから袋入りへと変わったからだ、とドッグでは云っている。それにも抱わらず樽製造は他の連中よりも恵まれて居り、数も多い。樽製造には液体用樽類製造と乾物用樽類製造の二種類があり、前者は高度技術者で賃金もよいが、後者はどうか樽屋をやっているようなものもあり、樽や箱の修理をやっつけ仕事でやるのだが賃金は低い。「貧困」二八%、「極貧」一〇%。

△食品業▽ 屠殺業、年上期パン焼職、酒造人の徒弟、砂糖精製業、魚類保蔵業、葉巻製造業を含む。最も賃金が高いのは屠殺業と酒造人徒弟だ。その他のこの階層における被傭者は、全体的に賃金、地位共に低い。職により多少の相違はあるが低賃金の移民労働者に悩まされている。「貧困」二二・五%

「極貧」四%。

△家内工業▽ 雇用人はなく、家中総出で働いているものはスリッパ作り、玩具製作、薪木切断等々。自分だけでするものには靴職人、衣服(縫製及び修理)時計(修理のみ)、錠前、額縁など。賃金労働者としてではなく独立して仕事をしている掃除人、印刷屋もこれに属する。古い産業制度の遺物である興味深い階層。貧乏であることや生活様式に於いては階層2・3 或いは極めて貧しい職人達と幾らも変わらない。自分でする仕事がない時には、被傭者となつて働く。「貧困」二六%、「極貧」九・五%。

△小工場主▽ 一十人の雇用人。大部分は生活力旺盛で富裕だが、「安賃金で職工を酷使している」と悪口をいわれており、自分の雇用人よりも多少ましな生活をしているにすぎない連中も多数いる。

△路上販売▽ 大道芸人・露店商・日用雑貨商の三種からなる。オルガン弾き、アクロバット、乞食専門、市電の料金箱からベニー札をこまかす者、新聞の売り、果物魚類の売り、物々交換屋等を含む。露店商及び日用雑貨商の一部は貧困線を確実に上廻る生活をしておりE階級に属する。定職を持つ大衆音楽家、玉突きゲーム取り、背景画家、移動写真師を含めて資本、車、ろば等をもっている果物魚類の売り、屋台のコーヒー屋、猫肉屋等、それに繁昌している日用雑貨商達がそれである。路上販売はイースト・エンドにおける大きい階層だ。

「行商」と「露店商」とは、最低線のものを除いては全く別物である。前者は小型の巡回商人、後者は屋台、車、籠に商品をつめた一種の開放的で気心

が知れた商店だ。日用雑貨商は殆んど全部がユダヤ人で、あの民族の貧困者と似たり寄つたりの生活をしていながら、手広く商売をしている。彼等の生活は神秘的で、表面からは何もわからない。路上販売は社会的地位も低く、波風の多い人生でありながら繁昌しているものは熟練工よりも豊かな暮らしをしている。「貧困」四四・二五%、「極貧」二五%。

(1) Chapter II Concerning the Whole District Under Review. pp. 32-61
三、貧 困(1)

貧困というよりも寧ろ無秩序であることに問題があるA階級は別として、B・C・D階級に見られる貧困について考えてみたい。我々がとり上げた対象のうち「極めて貧しい」(B階級)十万人は、常に程度の差はあれ「窮乏」⁽²⁾状態にある。彼等の栄養は偏つたものだし、ひどい着物を着ているが、彼等のうち僅か一%が「貧窮」状態にあるにすぎない。毎日、毎日が食べることに追われている生活だが、いつも不幸な訳ではなく、彼等なりに楽しむことも知っている。浮浪人同様の者もいて、一時期を救貧院ですごしたり院外救助を受けたりするものもあるが一般的な傾向としては、何とかして救貧院に入ることとを避けようとする。他方二十万の「貧しい」人(C・D階級)は、全般的に羨らかましく「窮乏」状態にはない。何とかかまともな栄養と着物を得ている。しかし彼等の生活は斗争の連続であり、楽しみのない生活である。これは彼等が幸福であるか否か、ということとは別問題だ。

1 貧困の原因

雇用上の問題——仕事がない、もしくは低賃金——習慣・怠惰・計画性のない支出というような問題——環境・疾病・大家族の問題。貧困の原因はこのいずれかである。これらの割合関係を明きらかにし、ひいては如何なる救済策がとられるべきか、という究極の問題を考える一助とするために、以下「貧困」あるいは「極貧」の四千ケースを分析してみよう。なお、このケースは、各地区の学務訪問員により記載された貧困者の中から典型的なものを取り上げたものであり、被救恤民のみではない。

四千ケースのうち、一六〇〇世帯はA・B階級(極貧)に、二四〇〇世帯はC・D階級(貧困)に属する。この両表を比較すると、「貧困」では「極貧」によりも、雇用上の問題に起因するものが多く飲酒癖によるものはほとんど同率だ。「極貧」の場合、日雇(又は不規則)労働と低賃金は直結して居り、五%にのぼるが、「貧困」では両者は別問題で四三%は仕事の不規則性、二五%は低賃金に起因する。飲酒癖こそ諸悪の原因だと考える人達には、イースト・エンドで僅か一四%だとすることに異議があるが、ここで取上げたのは主原因である場合のみだということを申し上げたい。副因としてならば勿論その割合は増加しよう。

2 失業者

疾病のために働けない場合を除けば、労働に不適当な二種類の資質がある。その一つは低賃金を誘導するもの、もう一つは不規則雇用を誘導するものだ。仕事を覚えようとする気がない者、朝寝坊、他

第四表 「極貧」(A・B階級)の原因分析

	実数	百分率	実数	百分率
1 浮浪人	—	—	60	4
2 日雇労働者	697	43	878	55(雇用上の問題)
3 不規則労働者, 低賃金	141	9		
4 少額利潤所得	40	3		
5 飲酒癖(夫又は夫妻共)	152	9	231	14(習慣上の問題)
6 飲酒癖又は浪費癖の妻	79	5		
7 疾病又は虚弱体質	170	10	441	27(環境上の問題)
8 大家族	124	8		
9 不規則労働者であり, かつ疾病又は大家族のもの	147	9		
	—	—	1,610	100

の者が一時間でやる仕事を三時間もかかる者、一つの仕事に腰を落着けられないもの、気まぐれな者、疾病・虚弱・痲疾の中には入れられていないが視力が弱いとか神経衰弱などで働けない者、それに知能が低い者達だ。

私は、雇用上の問題に起因している貧困者の集団を解体すると同時に、彼等の経済能力をB階級(賃金もよく規則的労)と比較したい。失業対策をたてる際、まず必要なことだと考えるからに他なら

第五表 「貧困」(C・D階級)の原因分析

	実数	百分率	実数	百分率
1 浮浪人	—	—	—	—
2 低賃金(規則的稼得)	503	20	1,668	68(雇用上の問題)
3 不規則所得	1,052	43		
4 少額利潤所得	113	5		
5 飲酒癖(夫又は夫妻共)	167	7	322	13(習慣上の問題)
6 飲酒癖又は浪費癖の妻	155	6		
7 疾病又は虚弱体質	123	5	476	19(環境上の問題)
8 大家族	223	9		
9 不規則労働者であり, かつ疾病又は大家族のもの	130	5		
			2,466	100

「失業者」の他に「不規則労働者」も失業者の中に入ると思われるので、その数には幅がある。この考えでいくと、階層1、2、3の全部及びB・C階級に入っている職人がそれだ。ここでは失業者日曜大会の資料を記そう。

階層1の場合、彼等が本当に仕事をしなかったという事もはつきりしている訳ではないが、彼等に適するような仕事は極めて少ない。彼等に対する

社会的義務が何であれ、幾ら仕事を提示しても、果そうとはしないで拒んだり投出したりする。そしてもっと適当な仕事はないものか、と探し続けるのだ。仕事は試みでしかない。「失業」問題は、彼等のうち、試みに耐えて自力で階層2へと昇進していく人々だけについて云えることだ。

階層2の場合、或る週には大部分の者が働いているかと思えば、或る週には殆んど誰も働いていない、というような生活だ。彼等の地位が改善されるためには、仕事をもっと規則的になるか或いは賃金の割合が高くなる以外にない。彼等は失業しているのではなく就業条件が悪いのだ。

階層3の場合も同様だ。彼等の場合、試しにやってみる期間は最低一年だし、その上個人差があるので、どこを以って失業とするか判断しにくいのだが、結局、少量の仕事を多数の労働者で分け合っている形なので余剰労働力の分だけ「失業」者に相当すると云える。

貧しい、或いは極めて貧しい人達の大部分にとつては、いつも仕事が払底している訳だが、一体、彼等は仕事をしているとき以外の時間を何に用いているか、どのように役立っているかを考慮すべきではないだろうか。仕事全体を考えると、彼等の余暇時間を組織化して、労働力が不足している部分を補うことが必要だし、この点に関する限り、雇用主と労働者との利害は相反しない筈だ。しかし、仕事と労働力とをそれぞれ組織化して合致させていくというようなことにしても、この種の運動は大衆の盛上りを待つ他ないので、またもや行詰まってしま

う。つまり、現行の未組織な方式が大衆の好みと一致しているため、彼等は現状を改善しよう、と考えもしない。彼等はこの方式が気に入っているし、この方式は彼等にびったりしているのです、この悪循環が一体どこから始まっているかを指摘することは不可能なのだ。今こそ、彼等は、職探しその他のつまらないことに時間を空費させられていることを主張すべき時である。このような事態は悪で充滿されたものであり、競争の激化を招いていることは明白である。労働組合、労働者クラブ、友好団体は、彼等の時間を無為にすごさせないような制度を用意すべきである。

近代産業制度は、或る程度の失業者を抱えていないと、換言すれば、或る程度の余剰労働力を確保していなければ、経営できないような仕組みになっている。しかし今日のロンドンでは、この数がどの部門に於いても多すぎるし、下級労働者の間では余りにも尠大すぎるのではないだろうか。一部の雇用主達は、このような状態を彼等にとって有利なことだと考えているようだが、このような見方は余りにも近視眼的ではないだろうか。何故ならば、日雇労働の場合には賃金が安い、ということよりも、更に労働力が低下するものだからだ。すべての雇用主、地域社会、被傭者にとって、可能な限り日雇を廃し、規則的雇用（常傭）とすることが有益なのだとは私は信じて止まない。少量の仕事を多数の労働者でわかち合うことは、親切かつ正当なことのように見えるかも知れない。しかし、それは一時的な便法にすぎず劣悪な事態を長期化させることにもなる。

もしも余暇時間を組織化するならば、次のようなことを明きらかにすることができよう。どの程度仕事が必要でないか。どの時期に仕事があるのか、職業斡旋はどの程度可能であり現在実行されているか、仕事の不況の時には産業内でどの程度調達できるかなど。

機械の導入により、全ての労働者は、機械の前に同等の人間になる、と一部の人は考えているようだが、それは誤りである。むしろ機械は熟練労働者と不熟練労働者との相違を強調するだろう。そして機械工は常に熟練労働者に限定されて居り、彼等は容易には解雇されない。従って機械を多用している所では雇用関係は恒常的であり、機械が少ない所では不安定である。

ともあれBC階級共、仕事をする日数が月の半分に充たないのは事実であるし、B階級がする仕事は遅い上に拙劣であり、中途半端なものが多いことも事実である。その上、仮にB階級を掃するとすれば、従来、彼等が稼得し消費して来たものをC・D階級が容易に稼得、消費していくに違いない。とりわけC階級の暮らし向きは非常によくなるだろう。C・D（貧困）階級の貧困は主としてA・B（極貧）階級との競争により惹起されたものであるから、この階級を日々の生存競争から除去することこそ貧困問題を解決する唯一の道である、と私は確信する。この解決は私達の力が及ばぬようなものであろうか。

さて私は、生活水準が上昇しつつあること、そして、かつて減少したことがなかった極貧者の対人口比率は今や減少しつつあることを確信しているのだが、これが事実であるならば、当然次のようなこと

が云えよう。つまり、私達が信頼を寄せている個人主義社会は、その主義を全うするために、妥当な水準に達する生活を自立して営み得ない人々に対しては、その原因を問わず、彼等の生活について責任をとらざるを得ないことがわかり、また、十分そのようにできる日がいつか来るだろう。では、この時期はまだなのか。彼等は一様に質素な暮らしをしており、多くの者が惨めなまでの生活をしているにも拘らず自活できないという現状だ。彼等は僅かばかりの給料を貰っているにすぎないが、彼等がする仕事は余り価値がないものであるに違いない。さもなければ、もっと沢山の仕事を与えられてもよい筈だから。

彼等の存在は、自ら生活を支えて行けないということ以上に、国家にとり不断の重荷である。彼等が税として納入するものよりも、彼等に原因する出費の方が遥かに多額だ。彼等が存在するがために、生活・健康の水準を引上げようとするとき、無益な抵抗が惹起されていることもしばしばである。

現実に貧困に喘いでいる人々の問題を、真の労働者階級の問題とは切離して考えるべきである。後者の欲求は、もっと富の分配多くにあずかりたい、という全く異質のものだから。この両者を混同して「無数の飢えたる人々」とよんだり、数千人の労働者を数十数百人の貧窮者と一緒に扱うようなことは煽動者の企画であり、センセーショナルな文筆家とする事だ。私はこのような扱い方に強く反対する。本質的に異なった問題を混同することは双方の解決を不可能にするばかりで、良い結果は期待できないからである。

- (1) Chapter V, Poverty, p. 131, pp. 146—155
- (2) 「窮乏」(want) とする言葉を「貧困」(Po-

verty) の悪化した形態に「貧窮」(distress) という言葉を「窮乏」の悪化した形態について用いている。

四、対 策(一)

施与は貧困の救済策として、今や一步後退している。神の御名に於いて貧しき者に与え、不幸なる者を助けて貧窮者を救済することは信仰に適う道であるとされていたにも拘わらず、近來は、單なる施与の効果とか徳は否定され、一方、私達の信仰は積極面を失ってしまった。

さて私が考えたいのはB階級であり、ここにこそ今日の英国で呈されている貧困問題解決の鍵がある。一体、B階級は多すぎるのだ。既述のごとく、B階級は産業界に対して何ら益する所がないにも拘わらず、BはC・Dの足をひっぱり、C・DはEに重くのしかかっている。恰かも私達が家庭で老人や子ども病人の世話をみるように、國家がこのB階級の世話をすることは果して不可能だろうか。いや、これ以外に自尊心ある労働者に十分な給料を得させ、國民の生活水準を上昇させる方途はない。

B階級を國家の統制下におくことは被救恤民の源泉を調整することになるだろう。従つて、私が提案するものは救貧法の拡大と考えることができる。では、救貧法とは何か。それは制限された社会主義の一形態——個人主義國家の中の社会主義社会である。私の理想は、既に私達が住んでいる個人主義の中の社会主義という二重の制度を確立し、機能の分化を明瞭にすることである。それには社会主義の部分をもっと拡大することだ。國家社会主義の本業は不能者の生活の責任をとることであり、それを完全に成遂げることによって私達を重大な危機から救い

出す。個人主義体制は、目下の状態では破壊され、社会主義的革新によってあらゆる面から侵略されるだろうが、その大胆な教義は、自立出来ない人を除去した社会では、また良い機会を得るだろう。國家が人口の小部分の人について干渉することにより、残りの人々の生活に対する如何なる社会主義的干渉をも免れられるに違いない。

これが私の理論の概略である。実行案としては、この人達に産業集團の家族として生きる機会を与えられる。つまり、どこでもよいから土地と建築材料が安い場所に移住させる。良い家と良い食物を与えられ温く遇される。戸内又は戸外で終日、訓練・教育をうけ、彼等自身のためか或いは政府のために働く——彼等自身の住居を建てること、土地を耕すこと、着物を縫うこと、家具を作ること等。仕事を成遂げた際には、政府は原料その他の必要なものを何でも供給しなければならぬ。この仕事は出費が非常にかさむかとも思われるが実験してみなければわからない。生活に於ける社会主義的な面は、救貧院刑務所その他の全制度を包含するものであることにより、より慎重さを加えるし、産業を振興する刺激ともなる。

この種のアクションを急激に実施することは不可能だ。しかし、救貧法の門戸を少し開放して適當なギルドを作ること、老令或いは虚弱體質のために全く働くことが出来ない人に対するものは別として慈善的施与は一切差止めること、衛生に重点をおき過密往を制止すること等を機会があったら直ちに推進させるよう結果を見守ることは可能だろう。

この「制限された社会主義」の範囲内から次のような好結果を期待したい。A階級は、もはや「失業者」と混同されることはなく、徐々に存在を薄かさ

れるようになるだろう。現下のB階級は保護されるようになり、子ども達には十分な機会が用意されるだろう。緩慢な変化がおこり、或る者は自立してC・D階級に入るが、また或る者は國家の援助を受けているにも拘わらず自立できずして被救恤民へと転落する。差引合計すると國家が援助せねばならない人員数は現下のB階級よりも遥かに減少するだろう。C階級は沢山の仕事を、D階級は沢山の給料を得るようになり、而階級共E・F階級に接近するだろう。生活全体の水準は上昇し、それと共に人口問題の難点(国内増加や移入民に関する)も処理し易くなるだろう。

このような変化により私達は何を失うだろうか。或る種の詩的感興と面趣を失っていくのだ。乞食の襤褸着、彼等のたまさかの操宴、鼻歌の一節に陽気な騒ぎ、束の間の絶望、市民生活の礼儀作法に対する陽気なまでの無頓着さ——、こんなものとは想像によつてのみ触れることになり、芸術に委ねられるようになろう。

では最後に富者の位置について考えよう。諸計画が完成し、ついに貧困が産業を引きずり下す事もなくなり、産業界内で利潤の調整ができるようになる時、果して少数者の手に握られる富は減ずるだろうか。いや、この見通しは全く困難である。「富者が富の程度を減じることなくして貧者が貧しさの度合を減じ得る計画などある筈がない」ことも事実ではあるが富者は間違いなく存在し続けるだろうし富の程度の減少は相対的なものに過ぎないであろう。

(一) Chapter VI Class Relation p. 163 pp.

166—171.

この章で示された計画についてはFinal Reviewに詳述されている。